



特

門 7 6
號 3956
巻 4

不幸子中幸幸

(下)

南方熊楠

南方熊楠

前回にも述べた肉從榮鎖陽をむろたけ等を健陽劑とすこは

所謂同感療法で精神作用上之を信ずる者に多少利く

まも有る、今日学識進一尚其秘を信せぬ人には

何の効も無き事をう愛に一考を要するは此等の植物

か多様な帽類と等しく入陽の取を具し居る一件を此

事に就て過々明治廿九年春予屢は當時龍動附近の

ベリ一港本に在る富士艦士官室に招かれ士官の心得に於

て海軍を放し今の海軍は藤原實君杯も當時中佐で

海軍中將たる坂本一君也野間

口鼻をくんと詰つたと思ふ軍人は武勇第一とする

事なか英園杯には武人に科学の大家が多い、是は其入料

字に嗜好深く飲酒玉突杯を然る事に聊たりとす

暇有は其を科学の研究に轉じ用ゆるかうだ、叔一

か多事、舞舞しに執心した者の説を聞て記したは一概に

舞と呼ぶ物の舞が上手に舞ふ如と成ぬ如は稽園始めの

日から今、最初入が舞て見せ了手先きに注意して眼を

付る舞は必ず物に成すが、精神散れして人の手先きに氣

を配ぬ者は幾月教えても物に成ぬと有る、同も其原り

でとん本語下れ事物にても注意をすし人は必ず何か考

え月く万巻の書を讀み万里の旅をしてても何一つ注意深

からぬ人、如徒に錢を費す斗りた、之を活た製書機と

云ふのだと言て、野間口、(當時の)文尉等、後年旅順の戦況

を先帝に奏上した齋藤七士郎、其時少尉杯多く

大英博物館へ招き色々、外人等が何でも無いと思ふ物

に就て一一軍備上の参考とるべき事を話した、和歌山

の野知事始め官吏杯は、能物を狂人如き者と思ひ居り、

しも能物に對して、能物を高く生扱ひで、先年中

村啓次郎、其地野知事、能物を介して、能物祀、奉祀、来

つた、官知社乃ち中古國司奉幣の大山神社は、申結むも古

社に合祀を強制し無様に合祀請願書を寄せ居る然るに
前知事川上款晴氏は能辨の意を諒とし請願書は
考の期する吉社を合併するは殊念也として合併されず
た因て所平今知事上於ても其儘保留に任せられ
頼んを時保留せしむべし安心せよと言われ然
に僅か一二年の間に地方の小吏や偽神主が意地づく
と云ふが他補杯も永らく田舎に引籠り居るから和歌山
知事杯其若し自今か臥州に在る日なら島同様に見ん筈

の人物から此様な大猫を欺く様な仕向を受る是を以て
考ふと日本如き國では學術に身を投て不便を恐る田
舎で深く研究をせぬ者能辨の外に一向聞ぬもの
存事や其に引替る米國如きは人材をまんまの厚を
予姓年大故酒して農科大学校の前に降参を露して
したと云ふ大不禮を建て居る其校長ウキワは後
農務次官と成りて又農務省の人々は此傳聞
居るを然く前年又又種々辞を申して予を
招聘し又腹藏をく色々の事を諮詢する、
野にして作法無きことを不快で社國え妻子を伴
りて

ぬかちる毎度渡航を辞退し居るが、唯利を計しとす。當世風の本邦人、地方の時事日に非ざるを、是すは者。煙臺に於て此機斗りに日か照ぬ杯言て追々國家有家の材を懐いて空しく外國の用を為す者か出来たらう。漢思自淺胡恩深と古人の言た、此の如く、予に大不快を与え予が學術上多少國家の名譽に夏秋し又今もしつゝ有る功に授けらるに恥を以てする。和歌山縣知事、杯に比ふと、往年在美の頃交つた官吏諸君は實に厚德博愛の人、其の美風に留て居た、其も其苦何れも歴々の子弟で此頃地方に有るを怒らす。特種部落や河原乞食の汚染は一人も無つた。

前外務大臣内田康哉子杯は、故陸奥伯、其の予の居るに於て居たとして、毎度予が無礼を仕向こそ忍び、自ら馬小屋の二階に僞居す。予を訪んと迄、今日北京公使たる山鹿洞次郎氏も予が大英博物館にすら存せり。希有の蛙ヒロテス、予の古巴で復て救済せし時、小池張送衣ト二人來つて、上酒多く飲せて、是た此様を穢し事は、毎度海にか、長信をくばすと云ふに、所謂牧氏の職に在る人が約束を忽ち破り、其の平素の信義を失ふ。國の四綱とす、大義を無視し、其の道く、和歌山縣知事、恥を知り、其の須く、汗背けべし。此様を懷舊的談は、往々か

城に罷て富士艦の七官連に話した軍備上の参考とある
べき事は多かつたが、其を公けにせしめ外國人に聞か
す日本は大事と成すも知れぬか、言ふとして、
一物を見ても毎に一考有る神才の程を和歌山野や寺に
列示する為め唯二つだけ公けにして違ふ、精しく言つ
て建ち無駄だから、本は雑とた、一つは西比利加の
云ふ然が後脚と尾と股の鱗とを甘く使つて高い木へ上
るに人左にして、外れ落ぬ事だ、之を模範として、
が手放して自在に艦橋へ上る事を考へたら、
た今一は乃ち本情事を好む植物の倍信から考へた事

で、重利伯の談に穢い振りの奴は、
穢く思ふが、
て見れば笑しく見えたとて、
人は水と見、天人は瑠璃と見えたとて、
事を好く植物杯を、
て長命丸の製法位に、
無い、
ら生よの健陽劑に、
か男根に似て居るのと、
く膨脹勃興する力が、
て見れば笑しく見えたとて、
人は水と見、天人は瑠璃と見えたとて、
事を好く植物杯を、
て長命丸の製法位に、
無い、
ら生よの健陽劑に、
か男根に似て居るのと、
く膨脹勃興する力が、

しく寄生植物たる菌類の養分を互に交換するが其膨脹力
は実に噬の如き者有て一貫二貫の力を数尺跳轉するされ
例少く無い肉従若等にて我ては食物が少いので調へ無い
が是等の頭花植物も菌類よりは餘程高等の物を食する生能心が
墮落して菌と化して他の植物の根に寄生する寄生植物は
自治植物と違ひ他の懷中死んで生る者故永く世に存する
了事が死ぬ故に毒氣の向て来る一時に花を咲かせ肌を
残して自らは愈々枯死す覚悟が無ければ死ぬ、博徒や盜賊
が儲けた時散財して子孫を遺す物だ、今迄何にも無つた馬
を妻え明日死すと忽ち多く菌が群生し、板敷に散ると影も

留めぬも莊子の朝菌晦朔を知らずと言て所謂一日果を
其種菌は多くは銀陽等と齊しく男陽形を成し居る、田
邊をでるつねのちんぽと呼ぶ菌が有る、西洋でも学名
イオオアルス力ち太陽物と云ふ、田邊より六七町隔た
神子濱てふ村の少女に草の方に毒をさす者言ふ、此菌
は蛇卵より生ると言ひ、胡麻の毒と、学校教師は笑ふ能く
は一才も笑はれず、感心す、故何と左れば、昨日砂地を
掘ると蛇卵と間違ふ向い、柳の物が有る、其を解剖する
と、イオアルス木の芽をと食す、其が久く砂中に在る所
元雨が降ると蚊龍は久く地中の物なり人々、念ぢ怒長し

て 井き 長き 蓋が 止 止 之 ち 頭 に 臭 極 ち 糞 液 も 不 甚 そ 近

度
 の
 蝇
 が
 石
 を
 て
 食
 子
 と
 同
 時
 に
 胞
 子
 が
 蝇
 の
 頭
 に
 着
 き
 蝇

か
他
所
れ
飛
行
を
落
し
て
繭
糸
を
生
じ
次
に
蛇
卵
如
き
毒
を
生

じ雨を待て
後た
怒長す
其地の
國歌や
寄生
露花植物也

墨を同じき養生を成すのを男根の時々膨縮して定まる

は 誰 し 知 じ 通 り 石 か 解 刻 了 目 と 中 に 海 綿 体 と 云 物 か 有

居り女子の大陰唇を墨と同様に其收伸に因て或は腫れ

我
 休
 縮
 む
 是
 等
 は
 其
 心
 符
 さ
 之
 有
 は
 自
 分
 下
 宜
 驗
 し
 符
 了
 者
 有

が
多く
他人の物と
比較
研究
と云
簿に
行
ぬ
然
に
至
ひ
蘭

や寄生花植物
中には内部の構造が人身の海绵体に略

同じき物が多い、
其海綿体中に氣體又
液體を詰込蓄え置

た	の	が	湿	湿	正	を	得	て	忽	ち	膨	脹	す	こ	と	同	時	に	植	物	を	忽	
			しつぱく	めろし			え		た	ま	ほうて				とろし				い	ふ	ふ	い	た

乃 忌 長 交 生 了 之 之 詔 精 直 して 甘 く 之 に 似 丸 機 機 を

作つたう
空氣又水氣斗り
を使つて重い物を
跳飛ばし狭い穴

を	大	大	要	設	端	か	出	来	了	を	ろ	と	南	元	乞	生	斯	く
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

説き上下一同感心し
人事で有る
昨今上下
虚偽俗を成し

止を言^{ことば}~~ひ~~を謹むを盛徳と心得よか
辭り一きつゆめらんほ

杯	杯
言	言
は	は
い	い
其	其
蘭	蘭
其	其
物	物
に	に
何	何
か	か
大	大
敗	敗
徳	徳
の	の
要	要
素	素
五	五
居	居
了	了
如	如
く	く
心	心
符	符

一顧の價なき物と擯けしるゝか、
 万年書や蘭の鉢栽を

年
眺
め
た
つ
て
心
懸
き
者
に
は
何
の
所
益
無
く
若
し
何
か
一

功を立て、自他を救済せんと万物に注意深き人か見え
は所謂情事を好く植物程詰らぬ物も新と機巧を考案す
る材料となる事件の如し、**純楠**斯存事を口にす工斗り
で無い色を考付た機巧盛る多いか、今日の日本では善い
事を教やつて却つて功を掠おれ加之に身を苦めらるゝ
経験が自分たけでも既に多しからざる何れも岩礫濁り
安全だが**極**過は天下の英雄王景畧を前に和え乍ら其身を
桐るを見て英雄たふを知りて空しく関中の英雄を問ふた
金術の三億家は佛在日に生れて佛を知らんか返す返す
も平情を狂人扱ひにする地力俗吏こそ奇怪なれ(完)

